

日本百將傳一夕話

八

2331

日本百將傳一夕話卷之八



東都

目錄

○ 畠山重忠

○ 土肥實平

○ 三浦義澄

○ 小山朝政

○ 佐々木盛綱

○ 平泰時

松亭金水謹撰

○ 足利義氏

○ 平時頼

以上八將目錄終

永田姓



鎮守府將軍上總
今良兼四代

左衛門尉致經
秩父六郎將恒之孫

平武綱
秩父平郎

義家後三年各
戰二武功アリ

重綱 秩父權守

重弘 秩父太郎

重能 畠山莊司

重忠 畠山二郎

重保 畠山六郎

重秀 畠山次郎

畠山重忠

八皇十三代 土御門帝元久二年討死
今安政三辰迄 六百五十二年成

ハタケ ヤマ シゲ タキ ハ ユウニシテ アリ チカラ ヨリトモ ゲン シスル
モトモ アツシ ツネニナル センクト ウチ ガハ ノ ダン イチノ タニ
尤渥常為先驅 宇治河之軍一谷
之戰奥州之役皆有軍忠為北條

時政被冤殺

古今著聞集にのり。重忠法力あり。時に室八及び其の大力の士長居との入りの。
畠山と力を比べんとてをむ頼朝乃て相撲せしむ畠山と其に勝て長居が
肩骨を碎く終に廢人となり入るを恐怖しとて。蓋重忠が勇力是に限らば

高山重忠の始

二浦夜笠攻の工。和田義盛が傳ふ見えり。押重忠一族として。二浦が佐敷小堂
まて撃つ。その所謂あれおあむ。高山莊司重忠。小山田別業有重。兄弟二人。洛
小在。年来平家小奉公。重忠その子。道の道守り。二浦の一族と滅さんと。夜笠
の城へか。考さすと。頼朝亡し。とて。とて。遊び

按るに重忠の父有重。重忠の父。平家都で落ゆるとき。泣く泣く。渡来。出供せし。内府
宗盛。三つて。進く。招き。汝等。二人。の期。お及び。心で。易む。属従。公。神妙
あて。飲び。入。所。之。さ。六。何。方。ま。由。俱。ま。け。し。と。汝。等。が。子。供。家。人。ま。と。さ。東
国。小。在。と。り。て。身。ハ。西。海。小。在。と。り。と。心。ハ。東。小。通。り。ん。疾。く。在。所。へ。帰。る。一。若。運。令
竭。せ。て。世。小。在。と。ば。あ。む。べ。一。と。宣。へ。重。忠。有。重。兼。り。身。ハ。恩。の。一。お。小。使。の。也。
今。ハ。後。小。園。で。將。一。と。も。年。来。出。恩。と。業。が。あ。り。あ。ぐ。幸。で。君。の。難。で。見。捨。本。心。

二浦の城を攻めしむ。和田義盛が傳ふ見えり。押重忠一族として。二浦が佐敷小堂
まて撃つ。その所謂あれおあむ。高山莊司重忠。小山田別業有重。兄弟二人。洛
小在。年来平家小奉公。重忠その子。道の道守り。二浦の一族と滅さんと。夜笠
の城へか。考さすと。頼朝亡し。とて。とて。遊び

治承四年十月初旬。秩父次郎重忠。藤原の国長井の渡。佐敷の山陣へ。森。あ。ま
より。尙。家。請。る。半。沢。六。郎。成。清。と。招。き。ま。時。佐。敷。の。体。で。え。る。小。飛。龍。の。天。小。昇。る
か。わ。一。故。小。八。箇。室。の。大。小。名。從。ひ。麻。呂。ま。ど。の。み。り。の。な。り。吾。も。ま。と。の。麾。下。に。參。せん
と。わ。か。り。ひ。あ。ぐ。父。と。叔。父。と。平。家。小。在。り。そ。の。故。で。り。て。二。浦。小。對。一。小。坪。の。争。ひ。衣
笠。の。城。で。さ。攻。ま。す。今。佐。敷。へ。参。る。と。も。勅。に。許。容。あ。る。と。こ。の。と。奈。何。小。討。ら。ん。と
い。ハ。成。清。承。知。小。坪。夜。笠。の。戦。ひ。止。と。得。ぎ。の。後。也。二。浦。の。大。々。奈。ま。と。一。妾
小。佐。敷。に。教。對。あ。る。と。ま。と。父。君。叔。父。君。の。洛。小。在。ま。の。世。小。隨。ふ。也。是。ま。と。所。謂

あき小あらび。武門の慣ひ父子兄弟。教味方とあるゆらりとせむ。若遅くあき佐
 殿より。必定討ちて向らべし。然して後ハ降るとも。罪て負の貌あき。頼泰りあきん
 こそ上策と存むをあれと言ひ。小けまは重忠も心で交して。一族弟従。百修誘て従
 へ。長井の渡へ泰向老。佐殿三三とせ。皆ハ巨振らざる小頼の未著。神妙あは在あぐら。こ
 小四不審あきて。結をせ。美先小建。白旗ハ全。源家什代の旗。小少。も交る
 となり。こまその標で我と弁一も。ま。妻家小初。まの志あらん。ハ累代の長。こ浦
 小對。のうあま。び。う。脱小。後。明。自。殺。小。及。ぶ。羽。羽。翼。と。鍛。の。習。小。あ。ず。や。夫。等。の。分
 解。洋。小。述。上。と。今。に。重。忠。と。の。事。あ。て。い。の。旗。を。出。先。祖。八。幡。殿。武。衛。家。衛。進。討。の
 こと。在下より四代の祖。秩父十郎武。細。ある者。初て。四味方。小。泰。り。う。か。ま。下。の。白。旗。で
 揚。り。先。進。も。ま。ま。し。う。今。せ。ま。武。衛。以下。の。凶。徒。で。平。ぐ。近。く。ハ。悪。源。太。平。君。武。衛。の
 国。大。藏。谷。也。帶。刀。先生。義。賢。で。討。つ。り。と。ま。父。重。忠。四。味。方。小。泰。り。と。こ。の。旗。で。ま。責

落して。いひ。ま。ま。源。家。の。吉。瑞。ある。ゆ。ま。吉。例。と。是。て。新。持。仕。る。今。君。天下。と。か
 り。車。の。始。め。ふ。い。う。う。の。吉。例。と。あ。ま。ま。て。あ。り。う。る。あ。て。ひ。なり。ま。こ。浦。と。合。戦。の
 こ。小。坪。の。漢。あ。り。遭。一。ふ。敢。て。敵。對。む。所。存。あ。ら。び。彼。此。と。い。ひ。程。小。下。部。等。關
 譯。小。及。ぶ。ふ。より。止。と。得。む。う。と。會。つ。て。こ。浦。も。元。より。存。知。の。こと。なり。且。夜。笠。の。城。攻
 中。漢。在。下。が。統。治。の。こ。な。う。む。こ。浦。河。越。合。戰。と。軍。で。出。し。ひ。に。より。件。の。ま。小。及。ぶ。る
 かり。こ。その。分。解。と。做。け。ま。佐。殿。の。千。葉。と。浦。土。肥。と。總。の。人。と。を。い。ふ。あ。う。ん。と
 の。ま。宣。ふ。不。重。忠。と。陳。む。る。処。逸。く。ふ。その。理。あり。且。ま。時。東。國。小。於。て。武。威。と。輝。ま。妻。家。族。之
 渠。一。人。傳。ま。と。ま。及。小。學。界。び。と。結。士。と。懷。け。ん。珠。小。重。忠。ハ。誠。忠。なり。若。年。あ。ま。ま。と
 の。ま。一方。の。大。將。軍。と。奉。り。和。へ。う。ま。る。の。武。士。なり。四。件。容。あ。て。然。る。べし。こ。こ。に。揃。へ。て。言
 け。ま。佐。殿。即。は。前。小。下。部。等。と。結。び。の。重。忠。の。ま。七。七。歳。の
 ま。若。年。なり。と。い。ふ。文武。の。道。小。精。う。と。その。心。實。大。なり。結。小。於。ら。び。と。上。に。河



重忠宛を
 得ん
 武州二俣
 川
 戦死

らむ忠重の仁義と肯とま。小於て孫念の君長上下とまを称して。その行ひて
則とかり

按るに本朝通記小重忠源軍以下はとの一條傳小細書して。この時頼朝降
と評さんとま。然れども浦の一黨遺恨あると思はせてせむ。このことにて後
澄小後と義澄從容とて對ていそ。今天下二分あり。群雄執志一ならず。降る
者と受むんば。忍らるゝ大車放さるん。我曹積怨あり。この人ども。私の讎にて。
國家の急と後小せんや。若し評一ものあ。と言ふに。よとまを評し。先鋒の
お小あせりとの。武家評林小とま。とまを蓋に戸川越降らんと。請ふ時頼朝
三浦の一族小後せ。は義澄とま。すに。降と評し。小と裁り。然れども
夜半と攻る。秋父は戸川越かり。ぬふ之家と讎となすべ。同書の自注小いそ。
三浦從屬頼朝以往。由井衣笠之危難不更。其志源軍漸震至重忠降下。

為天下同席和文曾勿鬱恨先國家之危後私之讎源氏家復之大
功其就出其右乎可謂忠且義者欽憾太平一統之後未酬奮冠與父
讎戴天終身於牖下矣と見え。此段之浦を澄が殆小掲げおまへき
あまこと前文の因小あり。こ小書して参考小備ふ

かて高山重忠ハ八幡殿の舊例小慣ひ先登の初と令せると向ふ所とて。藤とま
なり。後仲退討のとき後經小房。宇治川小言名あり。一谷の閉戦小の。まは後經の隊
小房して。野城の軍功あり。屋島の戦ひ小勇名と顯り。奥及泰衡征伐のとき。例の先
登也。勳功多し。その餘の小東に功あり。今奉て等とま。その功の炳然とる。こ小其二三
て奉ん。後仲於小在。礼妨とま。そのゆえあり。頼朝とまを征さん。為範頼。後經とま
とて。宇治勢。田小向む。重忠先鋒とて。宇治川小條。馬とま。のし。う。入。其下
武隆の任人。由大串次郎。との。の。門。ト。後方に隨ひ。が。遠。ハ。歩。立。の。兵。由。思。ひ。の

外水深く。殊小重後と著し。遊ぎて幸ドける。重忠見るより右を伴
 一獲の上帯引抗。目より言く。揚て十段をり。遊をせむ。向ひの岸近くある時
 曳し。ゆて擲揚り。大串あま。考あま。筋斗うつて。起あり。武彦のふの伴人大
 串次郎宇治川の先陣と。大音小名。あけ。ま。教も味方も吐し。笑ふ心著て。先
 陣ハ島山次郎重忠三陣ハ大串次郎あり。し。ひ連し。ける。し。あ。重忠。島山馬を
 射。ま。己。歩。立。ある。に。か。る。拳。初。ハ。鬼。ウ。入。う。と。ま。人。感。ド。あ。へ。し。あ。え
 かくて。後。後。經。し。島山重忠と。六。院。の。所。所。で。守。護。し。て。在。一。が。い。ま。ま。後。仲。の。存。亡
 知。と。び。放。小。後。經。小。暇。と。も。て。と。百。餘。誘。て。引。率。一。と。條。河。原。小。う。ち。出。る。に。後
 仲。小。出。合。う。雲。時。弓。矢。を。争。ひ。一。が。この。時。後。仲。ハ。十。三。誘。に。替。あ。さ。れ。て。敵。一。が
 一。誘。踏。止。まり。縦。横。小。池。廻。り。ま。る。で。幸。ひ。敵。で。替。島山が。勢。合。軟。う。ゆ。て。是。が。為。小

元暦元年 正月十六日

四途際小。重忠これを。吾十七。集。小。で。小。陣。の。合。戦。より。教。度。戦。場。小
 針。さ。け。と。ど。ぞ。わ。ど。の。敵。と。見。ま。木。曾。の。所。内。小。四。天。王。と。せ。え。る。者。あ。ま。と。
 こ。と。夫。小。あ。ず。り。て。天。晴。武。者。よ。と。瞻。望。入。る。榛。沢。成。清。渠。と。六。樋。口。今。井。が
 妹。中。巴。女。と。木。曾。の。妻。な。り。肉。小。の。童。の。ど。く。我。ひ。小。條。ん。で。一。方。の。お。し。て。
 弟。夫。不。妻。の。勇。婦。な。り。と。使。て。重。忠。然。由。あり。一。う。女。の。為。に。逃。さ。ら。ま。後。代
 ま。で。の。恥。辱。な。り。と。組。で。祈。得。お。せ。ん。と。巴。と。目。が。け。て。弛。さ。せ。つ。間。ひ。近。く。あ。る。程。小
 木。曾。ハ。隔。て。傍。つ。つ。せ。む。左。右。と。島山ハ。巴。が。弓。の。う。に。廻。り。獲。の。袖。小。と。懸
 て。此。方。へ。曳。ハ。彼。方。へ。曳。く。互。小。雲。時。引。合。ひ。一。が。巴。が。馬。ハ。伝。及。第。一。春。風。と。の。後
 長。な。り。一。鞭。あ。て。あ。そ。り。け。ま。獲。の。袖。で。弄。し。引。切。二。段。を。り。ぞ。引。退。く。重。忠
 ハ。呆。さ。と。て。這。ハ。女。小。あ。ず。り。け。る。實。小。鬼。神。の。拳。初。あり。箇。根。の。人。小。射。箭。め
 ら。ま。ま。バ。恥。小。辱。と。重。ぬ。る。な。り。引。に。如。ト。と。必。ひ。う。院。の。所。所。へ。泰。り。し。と。重。忠。武

勇のこならび始め小のひでく寛優ありて懐く深く。和方小のをさく長下り。
 文治三年九月の以伊勢を沼田の四厨の重忠が所領地頭職なり。然るに重忠が自
 代実心あるの。負部家総が弟從共の家産を奪ひ復籍す。家總及断る
 といどの実心さう小兼引せむ。こ小於て社人共で鎌倉へあはせてこを訴ふ重
 忠月代の復籍を知らざる。あはれき誠度ある小因て所領四箇所を召よらる。
 千葉介胤心小頼らる。然る小重忠その日よりして。夜中更小枕小著む。うやむら
 勸むきど飲食せざる。七日小及べり。胤心小こきと受へた。いと武衛小十。
 ちやこの程ハ顔も平生小愛つて見えひ。いつ小由世の中ハ是までし。存きりい
 解なり。早く淨免ありて存きさ。以うし頼ひけむ。武衛法き思へて事小
 恩免あへし。となり胤心歎び訛呼す。重忠小こきと傳へ月道して管中以泰る重
 忠の管中に到り。里見冠者及成が。上座小ありて左右で白眼各方より。岐久丸そ

小恩小因て莊園を豫まりの月代と擇むべきなり。重忠日比清潔の志ハ他人小
 能く。と自慢の心ある所小今度実心が不義小因て大小恥辱を身に請ふ。惜
 く存る。といひ捨て退散。武藏国へ地下にぬ梶原景時とて。武衛小言と
 做しける。ハ重忠が今度の重罪。奮功と思へ。右さ少く窮途を加へらる。速小恩
 免ありして渠ハ心と意得けん。菅谷の飯小引参り。叛逆の風はあり。右被一統とも
 去時在国小此ハ更小四油断あへる。と例の強言と構へける。武衛車ハ是下下。
 小山朝政下河辺行平。結城朝光。三浦義隆。和田義盛等と下まき。如此の風聞
 あり。ひとまづ四使を五ら。且て重忠を正さるべき。まは。速小遣討使と遣はさる。
 べき。うの旨。宣く計らひ。中ま。この令にあはくはを禁。この可否との人者あり。
 去下朝光進。こ重忠が。廉直なる。君より。知し。右。集月代の不義に因て。登
 く。血筋氣を被らる。と。何ぞ。以て恨とせん。この風は。大なる。虚言と存る。之。然ま。

己身の面目なり。君就に世をとりぬ。多幸の奉公忠義を肯とま。此れを
 雖小逢と偏小運の頗くあらん。重忠が心言ふも頭相違ありぬにより。紀清文の
 進ませせんと紀清文を用ひし。所犯後籍のうらあり重忠偽あり余の君を
 よく知り。此段直しく執達あれと徒容とて述はし。景時日詮方なり。前
 小奈つてか。と言ふ。武衛をきて波多ひ何と宣ふともなく。行平と俱小四前へ
 更小そのと六宣つて。四方八方の四物落小替く時と移し。頼て奥へ入るひ。ら
 松藤次親家せして。出太刀一腰を下河を行平を賜ひける。今度と異を計らひ。ら
 口賞美とこそ知れ。是より後文治五年。奥及赤瀬追討のとき。赤瀬の豪士
 由利八郎を宇佐美実政擒て柳營小替たり。天野則景功を嫉之。実政と相争
 ぶ。その証迹分明あらむ。因て梶原景時をして。その事実を正さしむ。景時由利が
 前小到と跋扈して。同くせしむ。汝の赤瀬が豪士なり。其偽を繕り。作らむ。以て

汝と擒り。何の甲冑と著せる在のまに言せし。由利の死後を怒り。
 殿と白眼てひける。汝ハ幕府の臣なりや。そと及也館赤瀬ハ秀郷將軍の嫡
 統也。まもも之代孫守府將軍の孫と汲む。汝が主とのいとも。わの下き元徳
 と奪せし。割や吾と汝と何の勝劣ある。運盡囚人となる。と。勇士の憤ひ武
 門の幸なり。今の雜言大敵なり。汝が為小何を言んと辱し。あけし。景時ハま
 のより。もななく引退く。頼朝再び重忠とて。そのこと同しむ。重忠と正し。容と
 飲め。由利小對ひて。馬の家教の為小裸せし。遇ふ。古今例なき。又以て恥辱
 とせせ。我主頼朝の繫囚となつて。更及小痛せし。は然とどの佳運。竭せ。今天下
 一統小版。一の貴客恨心を懐くとあり。そと。奥羽の豪士素よりその名実未
 不真く。故小軍士等勲功で。之んが為小収獲する。所と論じて。定まらば。折何の事
 曾と著せる。老とと捕らむ。汝は欲と述はし。由利八郎。公のとき。重忠を尙の男の

奇怪小似也。同所をそと小對へん吾を捕へし。黒糸の鏡を著し。鹿毛の馬小
宗と見果して。実政なり。因て宇佐美で林一の入と。も重忠が容後で觀るに。下
按るに。由利八郎。豪雄の姿えあるに。より。頼朝徴て。まて。えのひ。渠小對ひて
宣ふやう。汝之主。泰衡の奥羽二及を。俘吞して。威で。東國小振ふて。收率。因て
吾東心を。苦しむ。然る小思ふ所と。殊小。僅小二十日と。踰せし。泰衡。殊依
国内。平定。以。渠十七萬の。貫首と。て。おのどく。脱き。奚と。百日。由支えざる。
志。終ふ。小。憾。なり。と。言の。下。より。由利八郎。宣ふ。どく。主の。泰衡。兩及。小。元帥。と。て。
帶甲。十萬。豪雄。殺。千。素。より。守。兵。寡。と。せ。む。然るに。幕府。發。向。と。は。兵。各
て。緒の。要害。を。固。め。し。む。對。戦。小。及。び。て。利。を。失。ひ。國。禍。死。し。泰。衡。中。結。小
守。を。奪。ふ。所。賊。臣。の。為。小。弑。せ。し。は。然。と。ど。も。この。大。敗。宛。然。恥。辱。し。と。ま。る。小
足ら。む。平。治。の。背。義。朝。の。東。海。十。八。國。を。平。治。と。し。い。ど。も。た。一。日。由。支。え。し。

して。遂小長田が為小弑せしは。後朝と泰衡と。その甲乙孰と。と。爽小のひけ具。
左右言と。結と。頼朝のま。このい。べき。ゆ。ゆ。幕。と。無。て。入。り。然。ま。ど。其。忠
勇。と。感。下。繫。囚。と。免。り。久。遠。の。重。忠。小。拘。り。ら。ぬ。ど。由。利。が。勇。壯。万。人。不。冠
く。と。ど。て。掲。げ。出。し。兜。を。と。勵。ま。せ。一。端。と。な。ま。せ。の。こ

此。外。の。物。語。種。々。あ。ま。と。車。長。け。ま。ど。の。大。累。と。奉。は。の。と。重。忠。う。節。操。忠。烈。孰
と。の。右。小。出。ん。然。ま。ど。の。不。幸。に。と。北。條。氏。が。盡。毒。の。為。小。ま。づ。と。の。嫡。子。六。郎。重。保。由
井。の。淡。小。討。と。り。と。の。時。重。忠。武。藏。小。在。る。と。救。送。隠。ま。あ。ら。じ。と。て。孫。倉。の。結。乃
大。軍。と。發。し。武。及。二。候。川。小。軍。以。重。忠。と。の。罪。と。謝。せ。ん。が。為。從。兵。百。之。十。餘。誘。む。と
と。而。の。素。肌。に。と。孫。倉。小。赴。く。踏。み。て。こ。ま。て。破。く。本。田。近。幸。様。は。夜。清。か。て。六。陳
細。ま。る。と。の。甲。斐。なり。彼。が。堂。々。と。軍。勢。の。百。と。り。我。小。受。る。何。と。以。て。う。敵。對。は。し
一。先。本。國。へ。引。退。き。結。む。を。俟。て。我。ふ。べ。し。と。の。い。で。重。忠。は。敢。む。今。敵。軍。法。大。あり

とも兵を還してとまを待たば実小強謀あるに似たり。渠つて逆兵の名を請ふが故
 不長の名を贖のころ。先君知人の明を損ふ吾為る小患びぞとして。垂小敵軍小執き
 従兵を左右小と。挑と戦ふと殺割多く教と切て愛甲之部。李薩が為小討と
 たり。千時歳四十二とる。二男重秀。近半。成清。その餘の兵士とふと小死と。この
 近き以印行の書に委しけり。其要を摘て紀と。元久二年

按るに本朝通記にのり。重忠天資寛大事。于君不貳。交友不詐。不
 挾勇功。有智而不争。有允文。允武。萬邦為憲。之風。然不時。時不
 君君北條氏。罹北難之權。忠意義志。虚一挙。嘘々天道。莫知歎
 使忠臣有此災。云重忠不幸。雖遇不虞之戮。其名光被。四表德
 輝。無後裔。雖世移星廻。善行長残。方策後世。何可不想乎。と
 見えたり。文長けは六摘要せり

鎮守府將軍良
 兼四代孫左門尉
 致好木子

頼朝
 山邊禪師
 武藏往後子孫
 相模國土肥往ス

頼朝四代孫
 中村座主

平宗平
 土肥次郎

實平
 土肥先次郎

維平
 土肥先次郎

倫平
 土肥先次郎

土肥實平

卒年未詳人皇十六代後鳥羽帝の御宇を
 今安政三辰を九百六十餘年

土肥實平者從頼朝于石橋于
 房州到處有軍功遂攻一谷之
 正面

按るに頼朝卿始り兵を奉りて石橋に敗ると。土肥の頼朝に隠
 りての時。實平一人始りて其の情を離れ。且人の目と忍び。その妻女をして
 船を造り。その命と命をせしむ。使より其船が誘に至り。儀して安房に渡り
 由。よ実平が討らひて。よは後念に於てその大功並びあき者とのをん

土肥実平の結

家系前小只はが如し。右兵衛佐頼朝高倉官の令旨を得て、兵を夏及
 小峯んとりて、まづ初め小峯玉の月代山本判官兼隆を討べりと定れ
 治承四年八月十七日とて期とて、圍て長崎口峯峯実平共一峯忠を憑りて
 とのりて、十七日以前土肥次郎実平と伴ひ、糸向志一と作せ遣はさし、新とて
 圍て月十六日、王藤介茂光土肥次郎実平、岡崎四郎峯峯実平、宇佐美之弟佐茂、大野
 藤内遠宗、加藤次景康を依志ある輩系會ひ圍て、佐殿一人宛次才に、閑所へ召て
 合戦の間の工とせ、殺せしむける。こ小軍、殺定まり、月廿六日の夜、山本が飯小が、夢せ
 終小判官兼隆をうち滅し、然もども、の東近郷に、深まなく、夢え、平家に
 志ある輩、定めて、佐殿を、殺すべし、先づ、則ひ人を、証せ、の、壁へあり、遅く、ま、さ、あ、ら
 びして、月廿二日、佐殿、石橋山、陣一の、院宣を、口旗の、模紙、小着、中四郎、惟重、是を

持て、去先小押立より、このと、頼小、夢え、相模の住人大庭景親、合才、保野五
 郎、景久、その他、平家に、隨從する、諸士の方へ、觸れ、その、勢合、て、二千餘、石橋
 山、北、向ふ、ま、下、伊、赤、祐、親、也、二百餘、勢、卒、て、石橋山の、後面を、結、こ、小
 之浦の、人、の、佐、殿の、權、便を、得て、進、小、在、新、と、出、ま、と、洪、お、以、圍、て、抑、留、せ、る、作、東
 法、陣、が、黨、類の、茅、宅を、焼、却、以、祐、親、遙、小、煙を、見、て、這、ハ、之、浦、黨、が、所、為、な、る、入、り
 退、活、遅、く、ま、づ、明、日、の、勢、加、つ、て、征、伐、難、長、る、べ、け、し、ま、その、先、小、佐、殿を、殺、入、と
 上、策、なり、と、矢、庭、小、軍、勢を、進、め、け、し、ま、佐、殿、前、後、小、敵、を、精、ひ、ま、と、標、下、合、し、る、
 軍、兵、皆、に、到、著、せ、び、心、の、跡、猛、小、勇、む、し、と、い、ども、寡、ハ、衆、小、敵、ま、ま、づ、以、憑、之、切、る、真
 田、共、一、峯、忠、を、討、死、せ、り、右、注、左、注、小、散、れ、て、佐、殿、の、嶺、を、攀、て、土、肥、の、橋、山、に、渡、り、
 の、北、條、時、政、の、子、峯、時、主、從、十、勢、を、かり、小、あ、る、と、大、庭、が、勢、と、挑、み、戦、ふ、然、れ、も
 入、勢、を、新、ま、ま、づ、筋、力、疲、ま、る、峯、小、の、登、望、が、た、り、や、ら、く、難、長、せ、り、を、り、う、る、



沙門永實
 佐殿小駄餉

獻志
 天保



永実

加藤五郎景員。日藤太光員。日藤次郎景康。宇佐美之郎祐茂。藤次親家。
日平次実政。一本真。若小加らんと此著る。時政改を左右小揮。と音い如
何小ありあ。佐殿の正性方。氣遣りく男。と。この峯嶺小分。登り。尋
秘。人。とありける。中。然らば。このひて。件。の。人。土肥の相。志。一。救。町の。強。祖。を。彼。方
此。方。と。心。を。励。ま。し。攀。登。ま。し。佐。殿。の。大。木。の。節。木。の。下。小。と。ち。の。ひ。土。肥。次。郎。実。平
の。正。性。方。の。侍。つ。ま。り。互。に。悦。び。あ。り。の。う。その。間。小。大。庭。修。束。軍。兵。と。せ。入。と
見。一。く。岡。の。地。を。動。さ。せ。か。つ。て。小。在。さん。と。心。件。あ。り。さ。な。ら。ず。箇。斗。の。人。救。せ
り。と。菓。向。ふ。し。も。さ。給。あ。り。さ。が。ま。づ。この。冲。に。入。て。替。く。難。を。避。ん。ぬ。と。今。の。後。さ。る
時。土。肥。実。平。ま。り。して。の。ま。這。の。屋。竟。の。所。あ。り。と。若。一。小。在。ま。さ。が。後。令。向。月。と。後。る
と。その。実。平。一。の。針。界。を。り。隠。し。奉。つ。と。安。し。この。大。勢。一。所。小。あり。あ。り。く。小
隱。し。保。ま。さ。ぞ。却。て。禍。を。曳。出。さん。今。雲。時。分。取。り。時。を。候。こ。所。要。ま。し。と。の。小

人々兼統せむ。え。う。命。の。君。に。捧。ぐ。危。急。存。亡。計。り。が。死。秋。小。殊。と。て。あ。り。ん。と
本。意。あ。り。と。思。腹。面。小。彰。り。ま。て。退。く。氣。を。い。あ。り。さ。り。け。り。実。平。は。て。その。言。葉。
實。小。最。も。極。中。若。小。忠。を。存。さ。る。志。維。の。か。く。と。あ。り。け。り。然。ま。ど。の。開。入。を。初。て。
其。二。を。知。ぬ。針。ら。ひ。今。の。別。離。の。後。に。大。ある。幸。なり。今。脚。の。長。小。葛。藤。故。の。為。小
見。出。ま。ま。て。主。従。と。ゆ。て。身。と。夫。の。何。と。必。て。命。誓。の。恥。辱。と。雪。ぐ。期。あ。り。ん。や。私
命。と。金。う。り。て。針。策。を。廻。し。後。竟。小。勝利。を。得。ん。と。愿。り。け。り。と。言。葉。と。場。理
を。推。て。その。得失。と。辨。け。し。は。佐。殿。の。実。平。が。り。ま。道。道。理。あり。各。ひ。と。ま。づ。還。致
と。頼。朝。世。小。あり。と。は。あ。り。必。集。著。者。と。と。頼。小。宣。ひ。け。り。今。の。事。給。方。な。り。各
獲。の。袖。を。絞。り。ま。ま。あ。り。落。失。り。土。肥。実。平。の。佐。殿。を。ま。づ。僵。木。の。冲。小。隠。し。軍。兵
の。選。く。と。候。ま。下。大。庭。若。小。あり。の。冲。と。怪。け。き。と。尋。秘。と。せ。り。梶。原。景。時。遮
て。小。あり。佐。殿。と。杖。一。と。別。景。時。が。伴。小。あり。か。つ。て。その。晚。に。及び。北。條。父子。と。小。到。る。根

の別業行実の弟に永実といふ法師あり。兄の行実と心合せ。汰餉を齎し。尋ねて
 里佐殿小奉る主従。誠小殊と一六。実小千金小換と一。と大心小感下の人用
 て実平侍より。世と泰平あうんとた。その永実と管根山の別業。誠小補せし。まの
 執し。まじり。うとあ。初て永実を案内者として。管根山小到。まの行実。許小未。諸人
 の多くと悪うり。まんと別永実。坊小入。替く休息。の。の行実。父良母。六條
 判官。為及。び左典。既。後。朝小好。と有て。別業。誠小補。せ。る。時。休。渡河。の。中。人。小
 準。文。を。賜。つ。て。行。実。を。介。抱。せ。し。と。今。せ。ま。し。と。あ。は。し。り。夫。等。の。善。好。と。忘。や。ら。ば。
 か。の。け。ら。と。ぞ。破。え。夫。より。後。土。肥。次。郎。実。平。が。計。ら。ひ。て。密。に。船。を。仕。立。其。船。渡
 り。艘。と。し。き。安。房。へ。渡。り。ま。ひ。て。より。諸。公。の。軍。勢。從。ひ。属。と。風。小。草。木。の。麿。く。が。如。く。
 故。て。謙。愈。う。ち。入。る。の。平。家。と。滅。り。て。天。下。一。統。一。德。追。補。使。と。な。り。る。の。由。偏。小。其。始
 土。肥。実。平。が。苦心。小。ま。ま。り。か。て。月。年。十。月。廿。六。日。相。模。の。國。府。小。著。り。兵。と。奉。り。

時より。僅六十余日あり。東国大半定まりて。覇府と後。念小閑。きの。人。諸。將。勇。士。の。補
 依。に。より。ま。と。範。相。義。経。の。勲。功。に。よ。り。所。あ。ま。と。脱。に。石。橋。の。役。の。大。難。を。脱。し。の。人。小。實。平。が。
 美。忠。の。致。す。起。因。て。天。下。一。統。の。後。の。厚。く。と。ま。て。賞。し。の。人。小。さ。も。治。承。四。年。十。月。廿。四。日。依
 殿。謙。愈。小。入。る。の。勲。功。の。賞。と。行。り。る。こ。小。於。て。飯。田。五。郎。の。修。東。武。者。次。郎。小。首。と。持。兼。次。
 ま。と。大。庭。之。郎。景。親。降。人。と。な。つ。て。こ。小。系。は。萩。野。五。郎。季。重。の。石。橋。山。小。て。佐。殿。小。思
 へ。か。り。老。な。り。と。て。門。外。に。於。て。首。を。刎。ら。る。元。と。の。他。小。首。を。刎。ら。る。者。約。合。六。十。餘
 人。と。せ。え。り。か。て。山。内。備。前。之。郎。月。四。郎。の。兩。人。ハ。佐。殿。より。廻。文。の。こ。き。今。平。家。の。盛。る。民
 佐。殿。流。囚。の。身。を。以。て。兵。と。奉。ん。と。合。つ。る。ハ。富。士。の。山。と。丈。鏡。猫。の。額。に。在。り。の。を。氣。の
 窺。ふ。小。異。あ。ら。び。と。思。は。り。て。徵。に。應。せ。ざ。ら。ば。今。回。擒。小。枕。き。大。庭。小。曳。出。し。佐。殿。自。身
 小。ら。出。て。汝。如。此。に。罵。し。と。ぞ。今。か。世。を。取。る。と。も。り。り。け。り。と。入。祖。累。世。の。家。人。と。て。大。庭
 小。に。送。ひ。し。を。寧。く。奈。有。怨。あ。難。き。所。な。り。と。ぞ。速。小。首。を。刎。す。と。土。肥。次。郎。に。命。せ

らは実平畏て兩人を曳出し。在るを序りて言ひやう。滝は兄弟その始め。悪はあまのこ
 あらまも景親に黨して怨敵とある。重くの罪ありといへど。集まらば祖父俊通及び父俊
 綱兩個ともは平治の乱に敵不俱。随分忠誠を抽て。脱小討死を致せし。若
 小のよう知一息一然るを集ま思ある心より。て思慮の中。悪にかり。若小侍其
 罪をりて首を刎らまは。父祖の幽魂苦の下めて。いふう歎き存まざし。新帯を
 没せせし。今で助けて後綱等が。奮功に報せのら。つゆ八頭殿の四廿菩提小の
 かりひたん然りといども。彼兄弟後日縁教など巧むべき。若小でゆひは。その儀ハ口
 心易く。べーと再之練めまじ。あつ然らば。父祖の功小免ト。能小討死とありけま。バ
 実平既まこの下で。彼兄弟にの合め。世帯を没せし。縁念を遂放ち。り。六兩人
 大不悦びて。感涙を流し。も。還一とあん。の條をりて。実平。仁智の推て。あ。べき
 かり

鎮守府將軍良兼
 四代孫致經ノ三男
 村岡小五郎忠通
 五代
 平義明 三浦大助

義澄 三浦荒次郎
 三浦小別當

義村 平六兵衛尉
 有綱 山口次郎
 重澄 大隅前司
 胤義 平判官

泰村 三浦若狭守
 室治元年六月五日
 法華堂於テ自害

三浦義澄

卒年未詳年歴全上

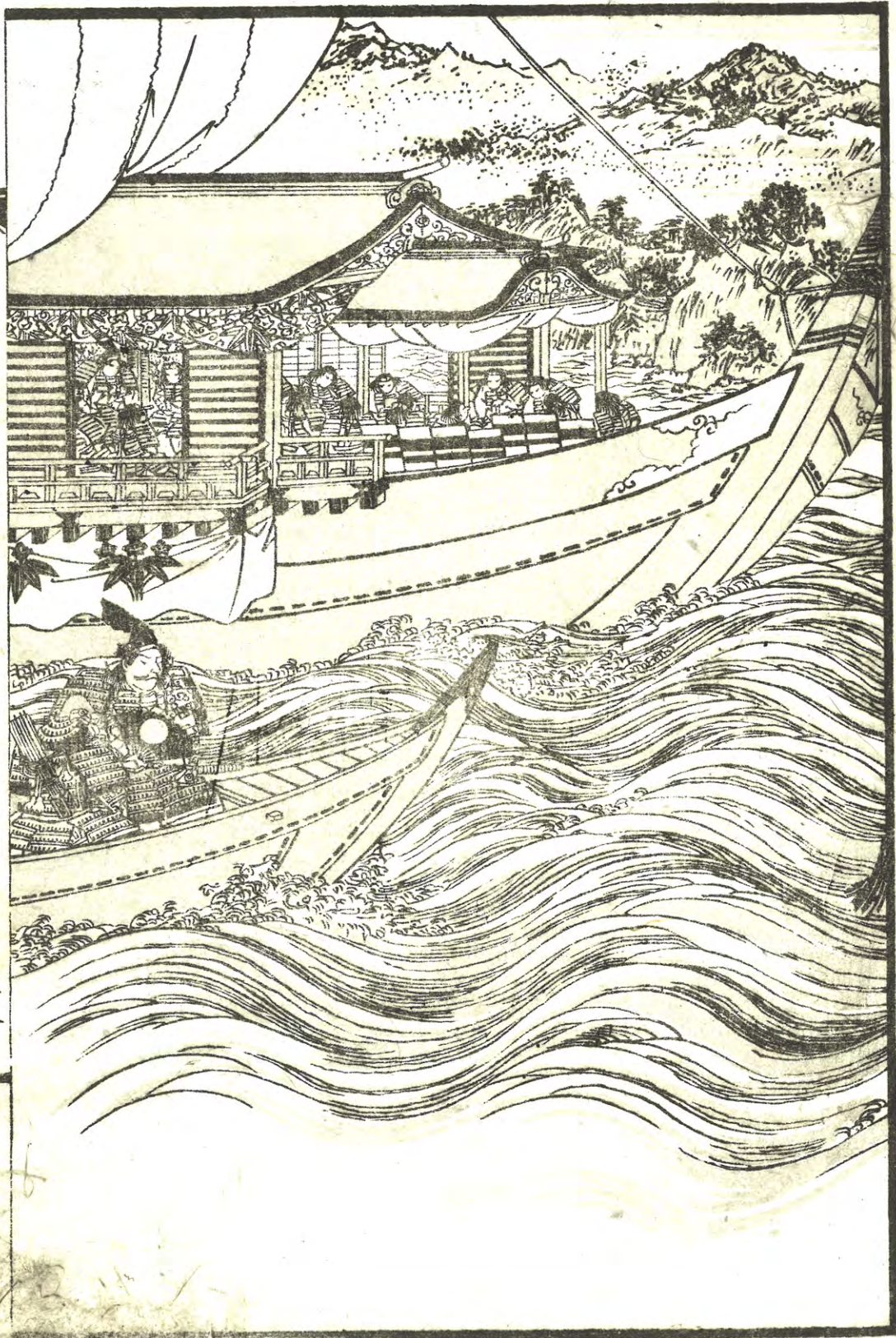
ミウラ ヨシズミハ マタ ヨリトモ ノシナリ ソンチ ヨシ
 三浦義澄者亦頼朝之士也其父義
 明為頼朝守城而死義澄處處軍
 旅從行居多

義澄父の遺命を守り。三浦衣笠を落てより。頼朝に隨ひ忠義を竭し。天下一
 統の功をえると。孰そ右に出入りて。窮遇志渥し。然るにその孫泰村の時。及び
 一族先村が。縁教に。且執權時頼朝が。實宥を。遂て悔り。終に一札を引出し。
 實治元年夏六月。一族法華堂に自殺す。父祖の忠を空あらし。

三浦義澄の結

初め頼朝石橋山に兵を奉りしとき、僅假ふよりて出張せしうと九子河の供ありより心あざび抑留せしむる石橋の軍散ばるとして三浦へ引返して折る。秩父小遇て一戦を逐味方大勝利とすといへど、秩父は江戸河城を語らひて先途の恥辱を雪めん為夜は小押寄るに、衆寡敵すとて能く父大助、後明ら小注まりて討死す。義澄及び一族を落し、頼朝を輔けしむ。このとき義澄の傳及び重忠が件小の粗述べし。まはとまき等て合を親のふべし。かくて治承四年八月廿九日、頼朝土肥実平と相俱し。扁舟小掉さして安房、北平、北郡、捕縛小著のふしとき、北條四郎時政父子、三浦義澄以下の輩あはくこ小素つと合し。数日の誓念を言下り。是より後、義澄は君の傍を離はとてかく、彰の形小副がぬ。十月廿四日、鎌倉より入りの、諸士勲功の賞で行む時、義澄を三浦介とす。その餘の軍士新恩に活し。或は本依に安堵せしむ。十月

十二日、鎌倉勲造の四亭小移渡あり。上總権介房常が宅あり。こ小徒しより入し。まはとまき頼朝卿孫念に、覇府で閑くの姑めたり。同月廿日、三浦介義澄始めて梳飯を奉はとまきより、以末恒例として、重臣文替奉はより、東鑑に顕然たり。抑三浦義澄は鎌倉草創の后として、既に重忠の條小ゆひるごとく、重忠は既に天を裁るる父の讎なり。然まはとまきも東国小於て一族多く、武勇勝き。智謀軍界、重忠が存小せり。のまはとまきも、渠君の麾下に属さば、東国盡く従ひ、靡き。忽ち天下平定あきん。されば吾小於て、怨敵の思ひを被さむといへど、渠が降さる容むんば、国家の為、且君の為、善らとて、慮ひ定め、君より内慮のありとて、更小怨を被さず。まはとまきも、以放てまはとまきより、後序を内考し、膝を離へて、更小讎との入とて、忘しむるが如く、因て先哲まはとまきを、評し、忠にして、且義ありとて、人個、国家平定の後、その怨を被ふことなく。その身、牖下に死せるとして、その行を、穢らさず。まはとまきも、余が父に、まはとまき



浦北の輩
 安房國嶺島にて
 佐殿小
 再會也

百景傳一及言卷之八

群玉堂藏本

小山朝政の始

出自家系前に以は如く如く。祖先より以來世々下野小住とて武名を顯さむを
 源家に志深よりける。因て治承四年九月、右殿所書とあるは、小山右衛門朝政
 下河を莊司行平豊信權守清元葛西之部清重等に遣はさる。あつく畏まり
 入付らざる志ある者を相結らひ、泰向志きより、四清あま、明き、治承五年改元あ
 つて、養和とぞ号らる。その年、二月、小むむ、志太先生、養慶ハ元来源家の二族ありと。
 忽地骨肉の好きを忘し、縁念を攻滅さんと。一味兵力の者を結らひ、その用意頗る之
 小下野の佐人長利又太郎忠綱ハ朝政一家よりといへど、人の心は種々あり、渠ハ
 平家に志深く、既に去年高倉宮ハ縁叛の時、平家小房一殊に宇治川の先登
 とて、朝政を滅し、宮と申射奉は、その功に終るを威名を揮ひ、朝政と其中善からむ。
 朝政ハ渠を憎み、折あふ、討果さんと。その便宜を窺ハ、忠綱由まこと、りを得て、小山

を殺んと欲けり。然るに今度志太養慶の企あるは、忠綱も、小山同党なり。その
 序として朝政を討隨へんとの結構なり。朝政初ハ、あま、志太先生、養慶より、
 使者を立て、云々、下野の同党ありと。兵營憑り、敵けるが朝政ハ、その心、忠直なる
 者ゆゑに争う、同党なま、源家再興の妨さむ。養慶とて、討げ、心中あ
 怒りける。物別る朝政が弟等とて、練めて、りける。小ハ、大敵ま、う、寡ハ
 衆を伐つらむ。養慶、骨肉の親を忘し、人の大倫に背くといへど、既に、強者を結
 らひ、集め、その勢之萬に、あま、殊に、親父ある政光、内裏守備とて、
 系師不在せ、養家、元勢なり。容易、敵討が、か、ん、され、が、宜に、回報し、討策
 を、せ、做し、の、千に、一、由、過、あ、ら、ど、その、理を、推て、ま、り、け、は、は、朝政ハ、実小と、曉
 る。その、小ハ、味方、は、ら、ん、と、横、投、し、て、使者を、呼、ひ、ぬ、か、は、は、長利、忠綱、ハ、何、を、名、と、し、て、
 朝政を、伐、む、便、形、の、あ、ら、む、と、し、ま、づ、その、心、を、懸、へ、ま、か、て、小山、朝政ハ、從、兵、五、十

朝政志太の
義廣を討ん
野木の宮小
出張を

小山朝政



小山朝政

番ハ兵幣と切て放てふ多和山七太が首の骨小段夫と立て馬より墮餘る夫鹿で義
 廣が右の腕を射削るも言ふ義廣懐リトやありひけん野木の宮より神の樹蔭を
 斥てひき退く。宗政怒て鎌倉へ逃せ何方までいへ逃蒐る。この時兄の朝政小佐あひ
 互小元車と欲びて夫より兄弟一ととなり猶由逃んとあける時下河を莊司行
 平岡四郎政茂も鎌倉より馳著て高野の涉に陣を固め落来る者を討んとひら
 小政て足利有綱嫡子佐野太弟基綱河曾派四郎廣綱木村五郎信綱太田権
 守行朝あど小手差原小堤中を霎時支ふるそのそりうう蒲符若乾頼始め八田知
 家孫田為成宇都宮信房小野寺道綱小栗重成下妻清氏淡川景澄等後馳
 小池著て小山朝政が陣に加りる義廣始めとををりて敵一がくありひり槍鞭を打て
 引退く鎌倉勢ハ勝に余ト岡を揚服と叩き敵を逐ふと二十餘町首を斬と敵知
 是比二十九人を生捕ける。さきと義廣をバ浅まといへど十分の勝利を得て軍兵大

小勇と欲び生捕と始め討取る所の首どもと持来し佐殿に献る。む小山朝政ハ叔
 箇所の赤を彼らに因て五郎宗政名代す。佐殿大少欲びひり首ハ腰裁小鳥け
 らと擒ハとましくに預らる。さて今度義廣に与力する輩の所領盡く没収せし宗
 政始め軍功の賞に先行之せひらり。と小足利又と五郎忠綱ハ敢なく義廣敗せしと
 跡を埋へていふを身由在所に居がて。今更後悔をせども詮なり。密小上野の国
 上の邦竜が奥に終り居るが所等桐生六郎が練よりてとせ立山陸道を
 急び通る。西海小針きりとある忠綱義の勇士とて人小部とてとッあり。ッ小ハ百人ガ
 カあり。ニッはいその声十里にばゆ。とッ六箇の長さ一寸なりとと。東かくて後小山朝政ハ
 のく忠勤と抽ける。あど頼朝厚く賞するひ右兵衛尉まて左衛門尉に補せし。は
 二代頼朝頼家の世小及び建仁元年の春二月城四郎長茂練叛く。先亡泰衡の
 弟伊達の高衡と結る。まづ頼朝追討の宣言と請んと潜に上系と便宜と窺ふ。

然るに一日壬午門帝院の凶所へ幸の小山朝政佐々木盛綱京師の守護するに
 こと小供奉以長茂その亡を窺ひ朝政少彼を誘ふ所守する所の小山が兵を
 固く防ぎ戦ふと小於て兵を退け長茂並に仙洞小到り鎌倉征伐の宣旨を
 入時に帝ハ還幸なりて打由仙洞寂寥とて長茂幸に面を怒らしことを請て
 再之と上皇もその相親を怒さるゝと敢て許さざらば遙に時の迄守るて守護の
 兵の来ると怒と長茂とて出て吉野に隠る朝政彼て兵士を惣へ院へ到るに賊ハ選
 ぬと小於て仕方と索ぬるに吉野の方に遁ゆとて並小兵を率と跡を逃ひ吉
 野に到りて長茂及び高働を誅しり固て忽地靜繼及び父也。そ朝政が勲功
 なり。ことより後長茂が甥城資盛就後国鳥坂の墨に落る佐々木盛綱とを
 扱と盛綱少條の少へ

人皇五十三代
 宇多天皇後胤

源秀義 佐々木源三

定綱 檢非違使
 左門少尉

經高 中務少
 入道

盛綱 左兵衛尉
 法名西念

高綱 四郎左門尉

成綱 佐々木三郎

信実 加地

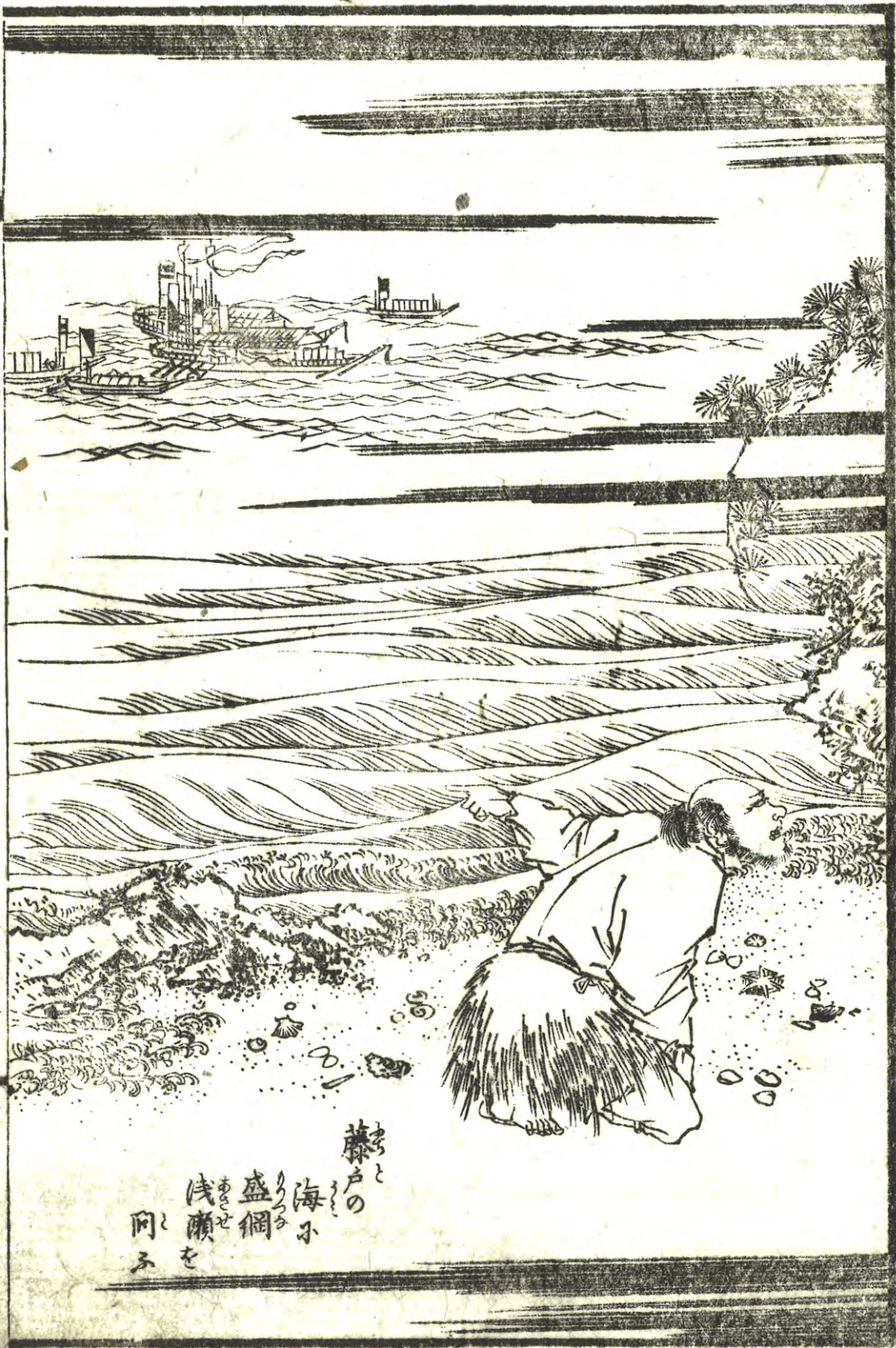
盛季 佐々木太郎兵衛
 左衛門尉

佐々木盛綱

卒年不詳

佐々木盛綱者江州之士而頼朝之
 將也勇名稍多馳馬于藤戸以却
 平軍進兵于鳥坂以擒坂額

按るに閑餘筆記にのぞく佐々木盛綱漁者を藤戸に殺す何ぞ其後恩ふ
 ほかその率の泄ると怒とてとを一新に執へることを得ざりしを可あり捕
 正成律僧を廢て奇針を出さんと欲以律僧肯らむ正成とを院へ帰すと
 を得ざりしを率成て後とを許し及に仁を食りしと見えたり



太刀を引抜き、一刀ふかの漁者で刺殺し海中へ抛入らう。かくて翌月の例のどく平
 家の陳より船で漕出し、波を渡り、悪口ひき下登綱家、隸部、從七八十、誘て
 從へて海へ颯とうち入は、大將軍と見て、あま判せよと宣へ、土肥次郎馬近出
 如何小佐、木殿物小狂ふう。この大海へ馬とうち入は、溺はあふ、敵軍の笑ひ種ある
 へま、大將軍の命なり、控へ、大音声小い、佐く木ハ岐ぬ、態して、かの月標小
 立あき、小竹と葉里に渡り、小折く深き所、馬あま、馬の太腹、浸るま、小
 ありぬ、を渡る軍勢、從て、佐く木ハ、淺瀬を、知り、入るぞ、續きて、渡り、このま、小三萬
 餘、誘、二、日、小響、で、双、て、馬、う、ち、入、は、歩、行、ま、あ、ら、う、皆、小、把、つ、き、或、ひ、ひ、ま、と、も、を、組、合
 して、曳く、声、ゆ、て、押、ゆ、け、が、さ、う、り、小、廣、き、海、面、由、人、の、山、と、ぞ、な、り、小、け、る、平、家、の、方、あ、ら
 へ、ま、ま、ま、と、海、中、ゆ、て、射、て、ま、ま、と、旗、を、揃、へ、て、射、出、ひ、矢、ハ、阜、厚、の、兩、小、吳、な、ら
 ね、と、勇、切、ら、る、源、氏、の、兵、渡、を、願、け、袖、を、翳、敵、の、船、小、近、う、り、て、態、を、以、て

船を引を、躍り上り、河で攻め、ふかくて、その日、暮小、六、平、家、の、船、ハ、沖、に、返、き、源、氏
 の、勢、ハ、見、渡、小、う、り、と、是、より、範、頼、豊、後、を、徇、ふ、その、功、全、く、登、綱、小、あり、と、備、前、の、見
 將、を、揚、ふ、と、是、より、後、二、代、將、軍、頼、家、の、世、に、ま、つ、て、城、小、太、弟、資、盛、ハ、叔、父、長、茂、に
 共、し、ける、が、長、茂、去、野、小、誅、せ、は、は、小、於、て、居、城、ある、敵、後、者、坂、小、楠、珍、ま、は、佐
 渡、城、後、の、諸、士、軍、と、奔、り、攻、落、さ、し、と、表、り、け、ど、の、城、兵、強、く、と、寄、子、の、二、あ、及、利、と
 矢、多、く、より、急、と、鎌、倉、へ、告、来、る、將、軍、家、評、議、あ、つ、て、討、ち、に、佐、く、木、登、綱、入、道、西、念、小
 命、せ、ら、る、この、時、登、綱、所、領、ある、上、野、の、国、磯、部、に、在、る、鎌、倉、の、使、節、汗、馬、で、馳、で、その
 台、命、と、述、ぶ、と、ま、登、綱、通、門、前、小、庭、跡、と、あり、け、る、が、この、台、命、と、ま、弁、内、小、の
 入、り、ぞ、その、ま、に、從、卒、次、才、に、来、ま、し、と、の、以、捨、て、敵、後、を、斥、て、進、登、以、從、兵、溺、く、小、進
 へ、續、く、こ、小、於、て、その、家、長、を、輕、忽、あ、ら、ん、と、言、い、け、ま、登、綱、家、長、を、示、し、て、い、ま
 天、慶、の、昔、宇、治、氏、部、卿、忠、文、東、征、の、命、下、は、小、及、び、著、で、抛、て、来、肉、一、節、刀、を、揚、り

て宿所小からを速に東方に赴くといふ勇士の志を以て善とす何を以て怪
 忽とせんやと衆人少て服せしむりかくて鳥坂に馳著て息を以て継ぎ攻む依流
 城後依流の兵士食末りて之を援く殊に空網の嫡子左衛門尉空香
 通記は海野行氏先登りて攻むと急む且城を危き所小將空香が叔母坂額女
 童形に打扮て城より故て射るむ其の精兵中の一矢由空よりむぎ多し
 が為に死傷する者稍多くして碎易せり。是下位及の豪士藤沢親清城背小廻り
 て是と射るに坂額女が股で貫き射む所を藤沢が兵折重を擡りて小放て城を
 資空城を棄て逃亡し城卒盡く及礼を空網一戦小功を得て坂額を護送し藤
 倉に泰の相家軍士で賞以て以て
 按るに坂額女力量も勝たり。周て甲及の士淺利を遠將軍にまうし清
 て坂額を賜り伴ひ飯り宿の妻にならうといふ

人皇五十四代

桓武天皇後胤

鎮守府將軍貞盛

曾孫阿多見四郎

聖範男北條四郎

時方曾孫

平時政 相模守

義時 右京大夫

江間小四郎

泰時 武藏守

初江間郎親義

時氏 修理亮

經時 武藏守

畏代執権

平泰時

人皇八十七代 後嵯峨帝 仁治三年六月辛
 今安政三辰迄 六百十五年 成

平泰時者北條義時之子也累世

執権于幕下故世称副元帥兼久

之役率軍破敵渡宇治川入洛其

子時氏徙三帝殺寇敵別立

天子置六波羅以守京都乃歸鎌

倉

平泰時の結

元北條氏鎌倉に在て執権す。九世のうら。泰時時頼て以て名おと称せり。執
 中泰時が言行その右小治はりのなり。兼久の乱發のま。鎌倉管中評議の條小。天
 皇兵を發して鎌倉を伐んとす。是君とて居て伐つ。運心といへる。比。然。ま。ど。も
 敗れり。天下の動亂と出。一。多。居。子。の。い。と。も。多。未。統。て。その。乱。を。平。ら。ん。に。忍
 びん。頼。以。静。む。が。あ。べ。う。び。然。あ。ぐ。軍。施。を。懸。へ。入。洛。せん。ハ。憚。あ。く。ん。九。若。下。箱
 根。足。柄。の。險。小。扱。り。ま。ま。と。防。ぎ。難。ら。え。ぬ。と。あり。け。ま。と。二。位。の。尼。ま。く。大。以。廣。元。等
 父。泰。時。中。同。意。し。て。大。軍。を。帥。以。入。洛。し。て。平。治。ま。る。に。着。る。う。び。と。其。評。議。一。変。し。ぬ。ま。ま。
 法。て。抵。頼。や。う。の。む。か。く。東。山。東。海。の。軍。を。督。し。忽。地。宇。治。で。破。り。入。洛。あり。之。帝。後。鳥。羽。洞
 隱。岐。小。須。麻。院。と。佐。伯。に。青。門。院。と。を。遠。國。に。幽。し。是。より。兩。六。波。羅。を。置。て。系。師。の。守。護。と
 以。と。是。居。ら。し。至。尊。と。た。り。その。罪。に。似。ら。う。と。い。ど。も。乱。を。鎮。む。の。故。あり。運。心。と

の。ま。ま。か。く。て。元。仁。元。年。泰。時。の。後。室。隠。練。の。と。あり。蓋。後。室。ハ。泰。時。の。繼。母。に
 して。幸。に。ま。ま。を。憎。む。と。い。ど。も。泰。時。愈。々。進。んで。ま。ま。に。奉。ら。う。と。意。母。の。如。し。泰。時。卒
 去。ま。る。に。及。び。泰。時。の。家。迹。を。嗣。を。嫉。み。泰。時。を。廢。し。て。生。る。所。の。政。村。で。執。権
 と。あり。ま。ま。鎌。倉。の。主。頼。隆。を。廢。し。二。浦。及。村。が。塔。宰相。申。ね。実。雅。と。り。將軍
 と。せ。ん。と。り。及。村。が。弟。小。倉。と。り。その。密。謀。廢。す。二。位。の。尼。ま。ま。と。り。大。小。治。ま。ま。と。り
 村。で。責。問。ま。ま。及。村。初。め。陳。ト。ま。ま。と。り。二。位。の。尼。更。に。可。以。責。む。と。再。之。かり。及
 村。陳。謝。ま。ま。と。り。雅。く。終。小。実。と。り。以。て。告。り。二。位。の。尼。泰。時。と。針。を。繼。母。と。り。夏
 の。北。條。に。執。居。さ。せ。修。黨。を。遠。國。に。竄。り。て。その。殃。を。断。つ。その。年。九。月。二。位。の。御。尾
 義。時。の。遺。迹。を。割。て。諸。子。の。祿。に。充。ん。と。欲。し。泰。時。を。し。て。多。寡。を。疏。さ。り。披。き。て
 こと。と。り。及。村。に。泰。時。が。從。然。才。に。滅。せ。り。禪。尼。大。小。治。ま。ま。の。汝。ハ。その。家。の。嫡。長
 と。り。受。る。所。小。弟。に。滅。む。と。是。何。の。細。き。と。り。と。泰。時。懐。と。養。て。の。ま。ま。居。恩。出家



時成
冠を教
久



北條やすの

北條
時
單騎

小して才徳あき由。積功の家は長きとて早く政事に關るとして得て嫡庶の分
 同トからば来地小放てハ御由望之積ふ所なり。若ト已て薄うして才妹の喜ひで
 見んと。こま小部するといはば。この義田許容ありま秋一と誠心に述べは六御尼
 まこのよりあく感涙を拭ひのひ右の左申と宜ふあぞ。泰時歎びて還夜し。遠
 おその舎才。まこ妹等を拓き集め二位の彈元の命に因て。父々遺迹の如く。配分
 をあふまきなり。とこの事已が中申より。知るといふを知らざれば。諸才有難しと領管は
 かくて此事維のみとかく。浅ゆえよりけま泰時が行を感下。勉めて教睦の行を為せり
 とぞ。脱にのまや上仁を好め下受て怒まざる者。あ上好む所。あま下馬より甚きあり。
 善惡にまざるま然なり。まま六郡縣を治るの士ハ勿論一家で保つる平人よりとも。主
 人か輩の行ひに因て人心厚薄變化せり。候まざるあま六泰時凶年にまつて燈
 燭を用ゐる舎ハ一葉に止まるか。已て繪約ハ餘財を以て貧民を救ふ。このて終

諸書に云え。自六今更小教言せざめて。實表二年九月北條敏時守時。敏
 以自書密紙入りけるに。家人等こまを汚ぎ。敏は脱に三個を摘みけま。後
 賊と見ふ。こま何方より取れ。まのこ頼にま。六北條泰時。單騎めて。かの敏へ
 統うれ。小賊も。選に去りぬ。とて。途中より引返せり。こま平三郎。密網泰時。小
 網て。ま。君執権の重職。小居の。輕く。動さる。こま。千慮の。一失。九国相
 と。表て。群衆を。向て。牛の。喘を。向ハ。相国の。職と。古き。書に。の。云。えて。以。從。國。教。と
 ひと。こ。の。先。人。を。て。殺。し。ぬ。其。後。に。計。り。の。ま。が。其。任。と。中。以。へ。諸。人。小。棟。梁。と。し
 て。動。靜。を。控。率。に。ま。と。こ。執。事。の。行。ひ。に。あ。ら。ま。る。吾。々。天。下。若。と。強。ま。る。と。お。ま。ま。ま
 う。ろ。小。ま。ら。ま。と。こ。詞。を。正。ま。し。練。め。け。ま。六。泰。時。從。容。と。り。て。襟。を。飲。め。足。下。ハ。後。論。誠
 に。故。あり。ま。ま。と。こ。の。世。に。由。親。族。を。お。り。の。故。今。見。弟。寇。の。為。に。困。ら。ら。る。我。人
 の。彈。り。と。彈。り。その。難。と。救。む。は。何。の。類。あり。ま。天。下。に。ま。ん。や。待。に。網。を。ま。花。才

城に圍げとも外其條にて宗と今日の難に於て他人のふるうと増えん我の
 曆兼之の天教に異なるをかりに於ての如くやう。と回答にけ且の直に彼人を
 威復を拭ひ更に查細大の教唆いとある個是より尙安貞三年正月後分が
 發掘し甲曹と帯して軍勢幕府に懸ひ集るるを何の取とあつた泰時以為
 若復賊との勢に素と其始大東紀らん頼小兵を遣るに若下と尾藤左近平
 二部統防兵衛尉等として津守で寇賊の權限ハのまに在りて先以地出せ
 集令し軍兵と不統てとあ被死へ地やうどに幕府忽地靜謐せり。之に後外
 に抵つて若そのいふ級ハ一人の寇賊なり。始りて終りて終るに鎌中と靜めん為の
 人とも泰時が秀村を感む。この條用の幽王が屢歎の為に烽火で奉りてその
 泰時が夫策として或人傍より。然れどもこの事と慮ふ亦彼の指き集むる処是ハ自
 来る所との執事ハ似て事の殊なり。法夫策ともいへうらび

金水塔で接まると鎌倉の執権九代のうち泰時廉進にして己で核と檢物を
 行ひに惠を垂して民を救ふをそのめ且つ任して世亦有難き善人あらずや。然れ
 ども捕その種の及ぶざる所ある既に賊後守時登り彼に法盜あつて白晝に入
 候備を鄙あらず然らん泰時將軍家の所内に於て。あつても時登ハ執権の連枝
 あると且つと人憚らざるいこの怪しきとあらずや。まゝ天福元年秋八月泰時
 奉教の為獲時を捕つ前溪の者に到りて死傷の者と青るに因て神評と述
 び彼に還りて犯科の者を搜し求めしむ岩平左衛門尉といへる者賊を捕へて
 ことを紙に轉問まに博奕より起り。その教を刺殺せしこととに因て因中に
 令一切博戲を禁せしむと蓋世間の疾きもの如きの犯科人あらずれば
 及ぶに就て人を殺し前溪の者に捨して執権の通行に至つて始りてあるとい
 その傍に人あらず如し。ま且つこそ効ゆすも。聖坊縁教の輩絶せしに靜謐

の世といひしが。其時泰時の子忠政の士老を思慮を悩まして下情は
 通せざるを志し久種と廳所の門前に懸け。行人をして其種を掃く者
 出で仁行せしむ。是罪を降らせしとぞ。是漢土光帝の衢室舜帝の若善
 の旗禹王の徳鼓湯王總禱の庭の及車と想像せしものあり。統中及敗
 武月五十箇條を撰まざる。今猶印刻して世に傳ふ。遠く新論を徳賞罰を
 亂その軍威を假る。初めす。六野曲の事あり。忠政の士十一人を擇み。
 判者として。其を宥む。賄賂の爲私曲あり。んことを欲せ。然しどもの新
 兩岐に且て一揆あり。是に於て。盤石を断り。ん。爲玄蕃元康連等と。相
 議して。定む。と。是より邪心の者。莫く。黎民悉く。怡泰。いと。え。は。且。生
 涯。儼。在。て。心。を。用。う。る。と。後。世。の。執。事。孰。そ。の。右。に。出。ん

鎮守府將軍
 陸奥守義家
 男從五位下式部大
 夫義國ノ孫

源義兼
 足利上總介

義氏
 足利齋頭
 從五位下

泰氏
 宮内少輔

賴氏
 尾張三郎
 左馬介

足利義氏

八皇十八代 後深草帝 建長六年卒
 今安政三辰迄 六百三年成

足利義氏者 賴朝之親戚也 建曆中
 和田一族 及時義氏 仕實朝 公守營門
 拒賊 且身自與朝夷 名義秀 相當其
 功 拔群 卽是尊氏之先也

按此の義氏が先武部大輔義國の上野の國新田に依りてのひ。平氏を逐ひ。四男を
 して下野の別業。足利以下に。を。え。う。義家。國。系。下。内。の。是。足。利。左。大。將。基。綱。の
 宿所。以下。著。し。る。時。基。綱。の。息。女。と。嫁。し。男。子。を。産。む。と。是。國。系。下。内。の。是。

足利義氏の結

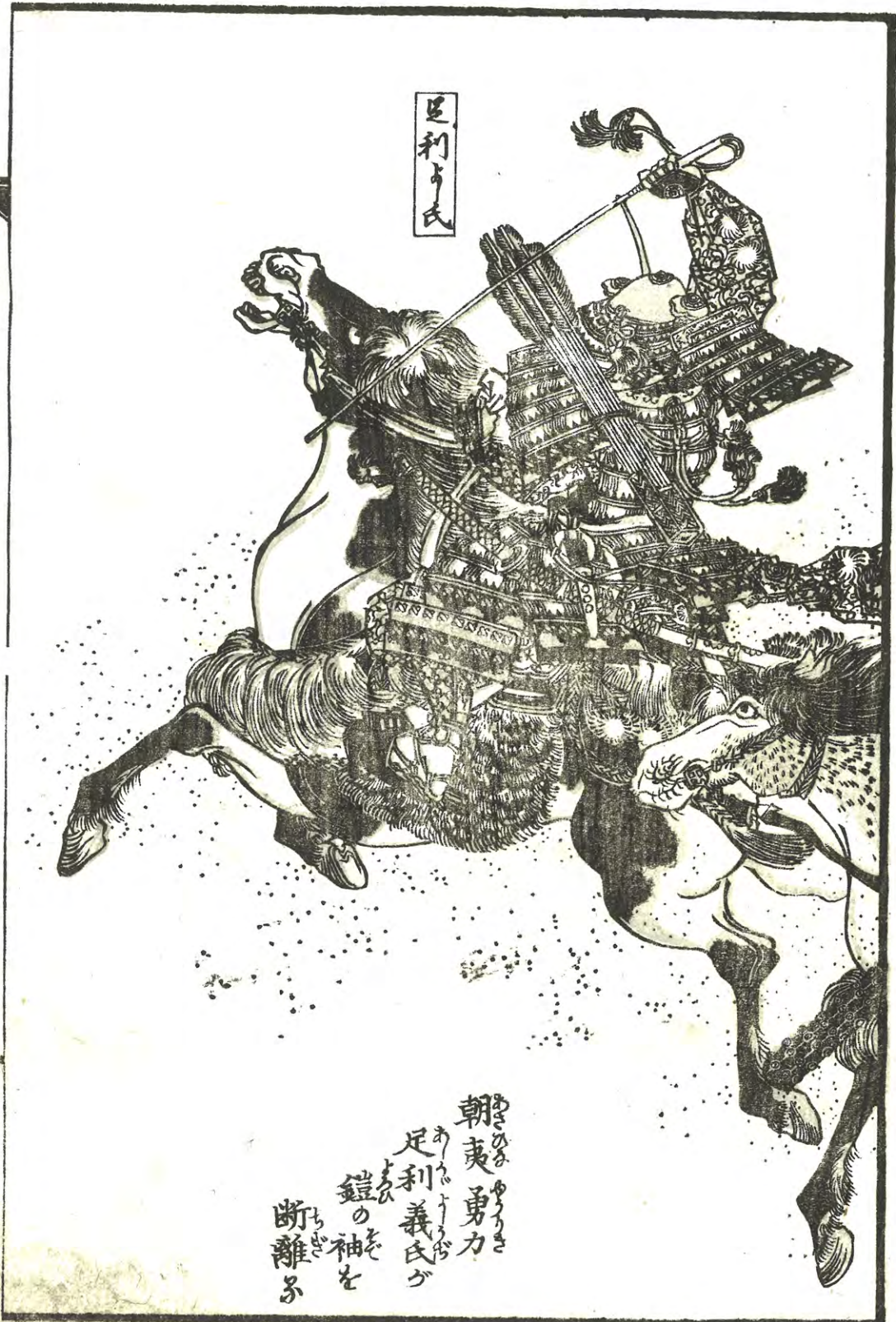
前記の如く義氏元來頼朝の親戚なりて西門とて備士自ら出で居せり
 其の父上総介良兼八治兼五年二月初日頼朝卿の媒にて北條時政の婿と爲り
 右大納家の所甚新及び子の母方の妹とて小放てその家倍繁榮せしむるを得しむるを
 則義氏ハ七の腹に儲けて時政の外孫なり義氏も武藏守泰時之女を娶りて
 官内少輔泰氏を産む泰氏も泰時之子修理亮時氏之女を娶はるを以て
 北條と救世の婚家なる故に親睦大に渾りけりかくて建保元年五月二日和
 田一家の乱に來て諸士東西小奔も鎌中鼎の沸が如し義氏並に甲冑を纏ひ柳
 菅に弛著て守備せりて嚴重なり和田義盛六郎にて由興力佐重の人救を結ひ
 嫡男常盛と姑めり親戚朋友百五十餘名雜兵共以千餘人之多以分つて幕
 府の南門相模守義時の亭西北の西門をうち圍むを二を以て攻立るも所討の

西南横大路に在るに因て政所の前は於て所家人等も支え死傷者多し
 乃干時波支野中務丞忠綱先登に進み是を防ぐに浦左衛門尉義村も池
 との堀に加りけるその骨肉の刻に及んで和田勢幕府の四面を圍む泰時朝時
 氏等兵略を盡して是を防ぐと頼朝夫妻之弟長秀所討の惣門を衝破り南庭に
 入て攻撃を急あらし刻火を所討小放つと義氏依て將軍家火で法華堂に避
 す頼朝夫妻秀極威を震ひ前に進み五十嵐小豊次甚貴之弟盛重新野
 左近將監景連將羽蓮宗以下の殺擧るも長秀に討たは高井重茂長秀と
 廻互に馬より墮しりと重茂敢なく首をさし相模次郎頼朝時由一旦長秀以て
 合しと兵を聚りて引込ひ下下足利之弟長氏政所の前に在る橋の傍小固り頼
 朝馳來りそとに引渡り足利殿と見し頼朝先列より多く此人に出合て勝
 負を争ふと心悟き教に達して一蹴仕んと進みよと長氏母のふあや及び長氏

羽衣秀



足利氏



朝夷勇力
足利義氏が
鎧の袖を
断離す



守重時是より為六波羅に在りて鎌倉に在りて政事の補佐とせしに於て是
 時と相續し頼朝の職を廢し鎌倉の王を換へんとす因て武藏景頼和泉前司は
 方を京師に遣し奏し請て後醍醐の上皇弟一皇子一弟中務卿宗尊親王を鎌
 倉御軍とせよとす。上皇降参りしより頃、建長四年夏四月鎌倉に遷奉は
 親王系を出りしとき。その行旅善美を盡し。上皇栗田に御行して是を獻後す
 内をとり。四月五日心美大將軍に任す。頼朝職に在ると八年十四歳にして遷ら
 て洛に返りしより。かくて後康元元年時頼朝の年二十にして職を武藏守長時に譲り
 最明より落飾し法名道崇と稱し。時頼佛系に返すを以て文應元年の春正月
 緒国に令して六月日及び二月の彼岸に殺生を禁じ弘長二年十月最明は於て卒
 ぬ。歳二十七とぞ云えり。

日本百將傳一夕話卷之八終



金川性